在家日蓮宗浄風会泰永会長就任20周年

特集

「純粋在家主義」で「本化仏教」弘通目指す

在家日蓮宗浄風会は、本化仏教（日蓮の教え）を信奉する「純粋在家主義」の教団として昭和六年（一九三一）に設立された。昭和六十二年（一九八七）、泰永二郎第四代会長（導師）が就任し、当時遭遇していた教団本部の移転問題などさまざまな困難を乗り越えるとともに、「社会に生き、社会を活かす」をスローガンに掲げて全国各地での講演や出版を通じた布教活動を行ない、教団を発展に導いてきた。泰永会長就任二十周年にあたり、教団の歩みと諸活動、今後の取り組みを特集する。

「浄風会は今まさに社会に羽ばたき、実践をもって成果を挙げうる時代に入っている」と語る泰永会長

勇奮勃々と社会に向かう

生活者が主体的に信仰保つ

泰永二郎第四代会長に聞く

三十六歳の若さで法燈を相続し、今年で就任二十周年を迎えた泰永会長に、本化仏教や在家主義について聞いた。

――二十年を振り返っての感想を一言。

泰永　「若い会長」ということで、ご信者の皆さんは期待よりも心配の方が大きかったのではないでしょうか（笑い）。そうした中で、心を一つにしてやってこられたのも、「御法（ごほう）のお計らい」以外の何物でもないし、ご信者の皆さんの護法の心の賜物だと思っております。

――浄風会の教えである「本化（ほんげ）仏教」とはどんな教えですか。

泰永　日蓮聖人の教えを「本化仏教」と呼んでいます。「本化」とは法華経の中に出てくる、末法の衆生救済を本仏釈尊から託された「本化の菩薩」のことです。末法の無宿善（未だ仏種子のない）の衆生が救われるには、釈尊の在世に説かれた「脱益（だっちゃく）仏教」ではなく、久遠実成の本仏による「下種（げしゅ）仏教」によるしかない。自らそれを実践し、弘められたのが日蓮聖人です。そういう教えに立つのが「本化仏教」です。

――「在家主義」を一言で言うと。

泰永　在家、すなわち社会に生きる生活者が、出家僧侶に一切頼ることなく、自ら主体的に信仰を保つということです。もちろん会長である私自身も在家です。在家の信者が、日々の生活の中で自分自身の信仰を高めながら、同時に正法弘通（布教活動）に励む。これが私たちの修行であり活動です。

――その中で会長と信者の違いは。

泰永　会長は、「法燈を継承した導師」という宗教上の絶対的立場を背負っています。その意味では、責任は重大です。

――宗教者として今、何をすべきだと考えますか。

泰永　今の世の中、毎日のように不祥事が報道されています。あらゆる場面でモラルの欠如が表面化していますね。私は、正しい道徳観念、倫理観を育てるのは正しい宗教をおいて他にないと思います。そういう意味でも、常に社会との接点を持ち、人々の生活の中に入って、人々を感化していくことです。

――これからの弘通への取り組みは。

泰永　この二十年間で「社会に開かれた浄風会」という理念が、ご信者の皆さんの中に浸透してきました。「勇奮勃々」（ゆうふんぼつぼつ）という言葉がありますが、私はご信者の前向きの姿勢を見ると勇気がわいてきます。この理念を具体的な成果に結びつける機運が高まったということでしょう。浄風会は今まさに社会に羽ばたき、実践をもって成果を挙げうる時代に入っています。そういうこれからの十年、二十年にしたいと思っています。

講演や出版通じ布教活動全国展開

在家信行と三大式典

浄風会はいわゆる現世利益をことさら強調する新興教団や既成仏教とは一線を画し、在家の立場から培った教学を根本に据えた信行活動を行なっている。修行の基礎となるのが、各支部道場で題目を口唱し、法門を学ぶ「支部参詣」や、信者宅での「常講」である。

「常講」は一定の信者軒数で組織される「地区」で毎月一、二回開かれる。教団の言う「在家信行」の基礎である。

教団の三大式典には、新年祝祷会（一月）、立宗節（四月）、御会式（十月）がある。

これらは全国各支部で開催される。また月一回のペースで、泰永会長の法門も全国にTV中継されている。

信徒宅での「常講」

御会式で法門を熱心に聴講する信者

青少年の育成

青少年を育成する活動として、戦前（戦後は昭和二十八年から再開）から続く「臨海団」が行なわれている。世代間の断絶が叫ばれる中、少、青、壮、老の四世代が団体生活を行ないながら、一体となってお題目を唱え、法門を学ぶ教団オリジナルの育成活動である。

社会貢献と地域交流

浄風会はボランティアや街頭募金などの社会貢献活動や、チャリティー餅つき大会など、地域との交流活動も行なっている。また、信者同士の交流を目的としたコーラス、墨絵、俳句の会などのサークル活動も活発に行なっている。

文京区千駄木の閑静な住宅街に建つ本部浄風会館

「社会に生き、社会を活かす」

浄風文化講演会

信仰のあり方をより現代的に改革した泰永二郎会長は昭和六十二年、三十六歳の若さで第四代の法燈を相続した。平成四年、根本道場（浄風会館）を現在の地である文京区千駄木に建設し、「社会に生き、社会を活かす」をスローガンに掲げ、現代的で社会性のある信仰のあり方をめざし、日蓮聖人が唱えた「お題目」を社会に弘める活動を推進している。

近年特に力を入れている「浄風文化講演会」は、平成八年から、函館・東京・前橋・高崎・名古屋・京都・大阪・徳島・松山などで毎年実施され、延べ百五十回の講演を行なってきた。講演会は後述の『浄風』購読友の会」とともに社会への窓口でもあり、弘通の橋頭堡ともいうべきものである。

浄風文化講演会での泰永会長講演テーマ

平成八年　「ゆたかに生きる」

平成九年　『南無』のこころ」

平成十年　「生命を考える」

平成十一年　「人生あるがままに生きる」

平成十二年　「法華経のこころ」

平成十三年　「正しい信仰が道を開く」

平成十四年　「宗教こそ人間のもの」

平成十五年　「蘇る…」

平成十六年　「デジタル社会と宗教」

平成十七年　「本当の平和とは―法華経の目指す世界―」

平成十八年　「仏になる―人はだれでも死ねば仏になれるのか―」

平成十九年　「暮らしの中に信仰がある―在家信行の意義―」

東京における文化講演会（11月4日）

創立から現在まで真摯に提示

出版活動

平成十一年に、広く社会に向けた弘通・教化に取り組むため、㈲「まどか出版」が設立され、泰永会長の著書（『本化仏教を説く』等五冊）のほか、『立正安国論』『妙法蓮華経―こころの旅』『菩薩たちの詩』といった弘通書籍のほか『水のように寄り添う心』『法華経に出値いて』などを出版し、社会との接点という役割を担っている。

教団出版物の、一般向け啓蒙誌『浄風』には「『浄風』購読友の会」（年間購読料千円）を設けている。また、各支部会館の近隣への『浄風』誌ポスティング活動も定期的に行なっている。（まどか出版ホームページ＝www.madokabooks.com）

本化仏教研究所を設立

今年一月、既設の教学院を発展的に解消し、「本化仏教研究所」を設立した。これまでの教学院が取り組んできた「伝統法義の継承と研鑽」「時代に即した法義の展開」に加え、「他教団の法義ならびに現代宗教学、社会学の研究・研鑽」等も行なう、より社会に向けた教学研究機関として設立したものである。（Eメールアドレス＝info@honge.jp）

社会倫理会議を設立

また、昨年五月、在家教団として常に社会との整合性を点検・検証するための機関として、「社会倫理会議」を設立した。

東京と大阪で祝う法灯相続20周年

今年は泰永会長就任二十周年。十月七日、東京・千駄木の教団本部に全国各地からの信者代表約六百人が参集し、記念祝賀会を盛大に開催した。

来賓を代表して祝辞を述べた西山茂東洋大学教授は「どの教団にもありがちな内紛が浄風会にもあったが、それを見事に乗り越えられた。鈴木基靖三代会長が八品教学を研鑽し説かれたが、泰永会長はそれを継承しつつ社会に拓く教学へと新展開を試みられた」と高く評価した。西山教授は平成十七年に東洋大学大学院の西山ゼミで浄風会調査プロジェクトを立ち上げ、「純粋在家主義運動の展開と変容―本法会・浄風教会の軌跡」という論文を社会学会に発表。現代社会における在家主義仏教運動の意義を強調してやまない。

泰永会長は祝賀会に先立って営まれた式典で日蓮聖人の御文を拝読し、聖人の教えを受持している気持を『勇奮勃々』、まさに全身に勇気がわいてくる」と言上したことを引いて挨拶。「『奮』は鳥が勢いよく飛び立つことを示す。社会に開かれた浄風会が次第に整ってきた。これから十年、二十年、勇奮勃々で頑張っていきましょう」と呼びかけた。

なお、十月十四日、大阪天王寺都ホテルでも、西日本地域の信者三百五十人が参集して祝賀会が開催された。

泰永会長の20周年を祝う西山教授㊨（東京の祝賀会）

泰永先生法灯相続20周年記念祝賀

西日本の信者が参集して祝った（大阪の祝賀会）

純粋な在家教団「浄風会」の歩み

略年表

浄風会は、昭和六年に創始者の秋尾真禄によって、旧来の寺院仏教から独立した純粋な在家教団として設立された。以来今日まで、戦前・戦後の激動の時代を通して、四代の指導者のもとで教団を発展させてきた。

●戦前期

昭和六年　初代会長秋尾真禄、新宿区淀橋に本部道場を建立し、「本門八品浄風教会」を設立する。

昭和十八年　秋尾会長逝去。在家主義厳守の立場から、本部道場であった浄風寺を放棄し自主独立する。

昭和十九年　「在家日蓮宗浄風会」結成。山崎廉吉、第二代会長に就任する。

●戦後期

昭和二十八年　宗教法人として認証を受ける。

昭和三十年　東京・飯田橋に根本道場を開筵する（四月）。

昭和三十三年　四月、青年部布教隊、破邪顕正の街頭演説を開始する。

この年、都内で二十五回開催。以後、街頭演説は、ほぼ毎年のように行なわれ、昭和四十八年まで続く。

昭和三十五年　破折誌『浄風タイムス』第一号発刊（四月）。

昭和三十八年　門祖（日隆上人）五百年祭式典を開催（六月）。

昭和四十二年　鈴木基靖著『本化宗要教相篇・上巻』発刊（六月）。

昭和四十六年　山崎会長逝去、鈴木基靖法嗣が法燈相続し、第三代会長に就任する。

昭和五十六年　高祖（日蓮聖人）七百年祭式典を池袋サンシャインシティ文化会館で開催（参詣者三千人）。

昭和六十二年　鈴木会長逝去、泰永二郎法嗣が法燈相続し、第四代会長に就任する。

●平成期

平成元年　「社会に生き、社会を活かす」のスローガンを発表。日扇大徳百年祭を日本青年館で開催する。

平成四年　文京区千駄木に新道場・浄風会館を開筵する（四月）。

平成十一年　㈲「まどか出版」設立。

平成十四年　日蓮聖人「立宗七五〇年祭」を開催。全国の支部をテレビ中継で結ぶ（四月）。

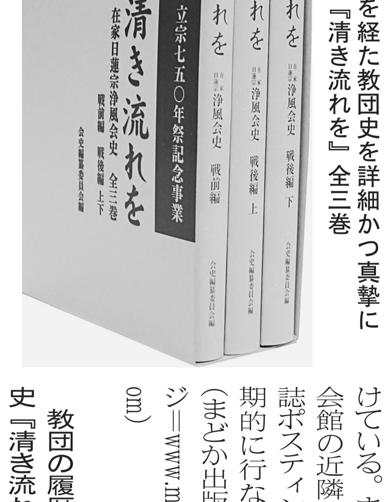
平成十七年　『浄風会史・『清きながれを』戦前編刊行（三月）。

平成十八年　『浄風会史・『同』戦後編（上下）』刊行（十月）。

教団と社会の関係を検証する「社会倫理会議」を設立する。

平成十九年　「本化仏教研究所」を設立する。

泰永会長就任二十周年を迎える（十月）。



紆余曲折を経た教団史を詳細かつ真摯に提示した『清き流れを』全三巻

教団の履歴書　浄風会史『清き流れを』全三巻を発刊

在家日蓮宗浄風会の教団史『清き流れを』全三巻が昨年末に発刊された。本書は戦前編、戦後編上・下からなり、七十余年にわたる同教団の軌跡が歴代代表の事跡、本部や地方支部の動向、運動方針や組織機構の変遷、教団功労者の紹介等を通じて、詳細に描かれている。

創立から現在までの浄風会の全体像が教団内部事情も含めて真摯に提示されている。出家者中心の寺院仏教に対し、世俗の職業を持つ在家者を担い手とする在家仏教教団として、「在家信行」を実践してきた点に、浄風会の特徴がある。その歩みは紆余曲折を経たものであることが、本書によって理解できる。

五つのプロジェクトチーム（PT）が発足

本部理事会（松山吉幸理事長）は八月、信者から寄せられた二十周年記念事業案をもとに、教団の中・長期計画策定のカギを握る左記の五つのプロジェクトチーム（PT）を発足させた。

○「人材確保・育成・能力開発戦略」PT

○「教団イメージ向上のための広報戦略」PT

○「福祉（介護）事業」PT

○「布教活動のための財源確保」PT

○「葬儀浄財・費用の生前積立・上納制度」PT

◆

在家日蓮宗浄風会（東京都文京区千駄木五ノ一九ノ五）＝電話〇三（五八一四）三三六二／FAX〇三（五八一四）三三六三。ホームページ＝www.jofukai.or.jp